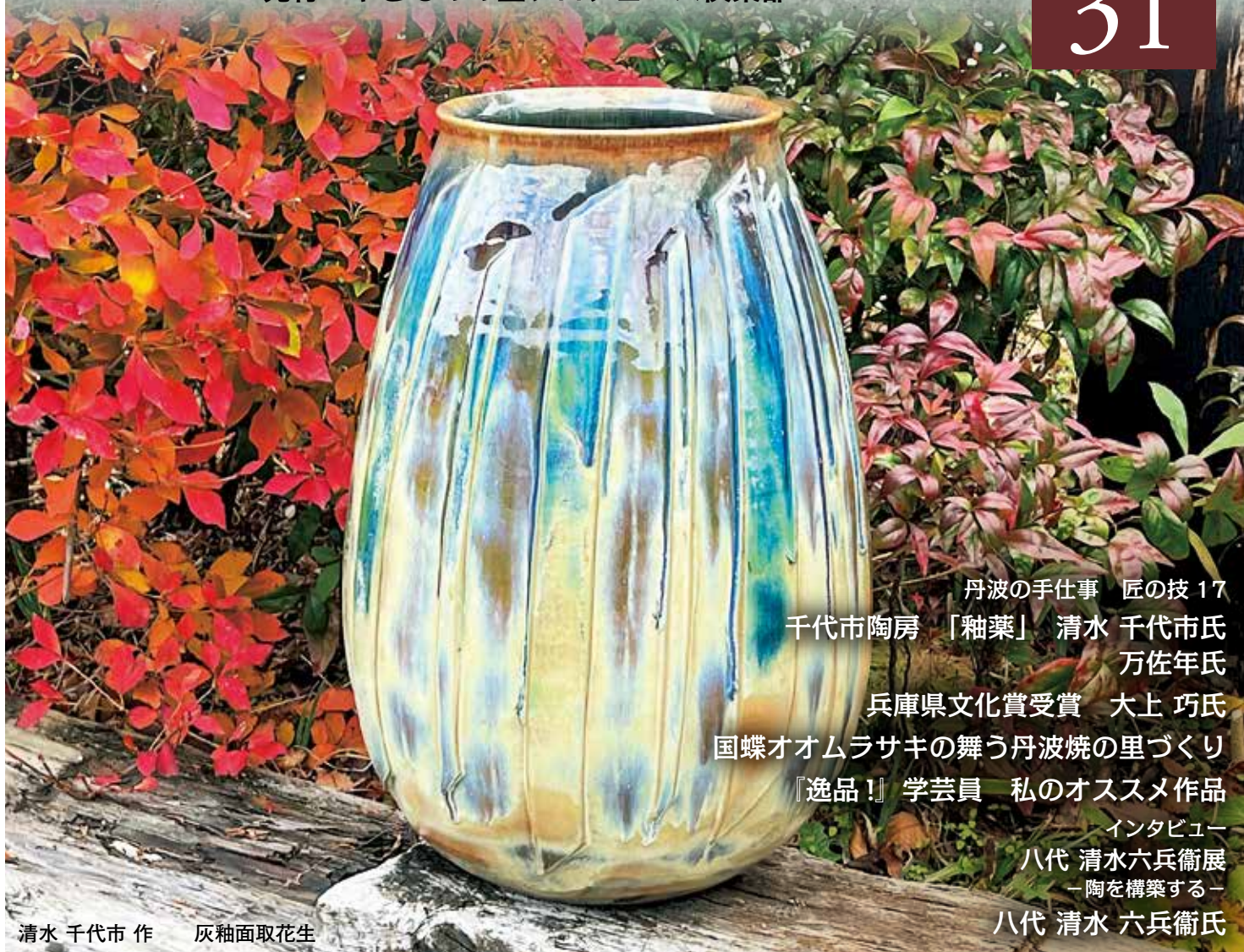


丹波焼の里 ミュゼシター

2022
spring
summer

vol.
31

発行：やきものの里プロデュース倶楽部



清水 千代市 作 灰釉面取花生

丹波の手仕事 匠の技 17

千代市陶房 「釉薬」 清水 千代市氏
万佐年氏

兵庫県文化賞受賞 大上 巧氏

国蝶オオムラサキの舞う丹波焼の里づくり

『逸品!』学芸員 私のオススメ作品

インタビュー

八代 清水六兵衛展

—陶を構築する—

八代 清水 六兵衛氏



千代市陶房 清水千代市・万佐年

〒669-2113

兵庫県丹波篠山市今田町上立杭5

電話 079-597-2288

文・佐藤 詩子 写真・迫田 隆



千代市陶房「釉薬」

清水 千代市氏・万佐年氏

丹波の手仕事

匠の技 17

千代市陶房は、丹波伝統工芸公園国立杭陶の郷に隣接し、自然溢れる小高い丘に建っています。代々続く窯元の八代目である清水千代市氏が京都での修行終え、丹波に戻る際二十三歳の若さで築窯されました。弟子を育てることによって自分もまた育てられるという意味を込めて「陶房」と名付けたとのこと。当初から現在まで弟子が途切れたことはないとおっしゃる。九代目となる万佐年氏に代は譲ったものの二人三脚で陶房を運営しておられます。

陶房のギャラリーや販売展示場には、丹波焼特有の焼き締めや釉薬が掛けられたやきものが所狭しと並んでいます。中でも若い頃から好んで多用されているのが灰釉です。糠（ぬか）、藁（わら）、粉（もみ）、竹、檜葉などの灰はもちろんのこと、線香や鶏糞の灰など30〜40種の灰釉を作られたそうです。市販のものは使わず、知人に頼んで材料集めに奔走。藁や粉は収穫した年によっても色が微妙に違うのだと、釉薬にはことさらのこだわりを持っておられます。「二十四、五歳の頃、来待石を貨車一杯買った。今売られているようなものではなく、とても上質の来待だった。今も倉庫に残っており、一生使える」と豪快なエピソードを話される。

万佐年氏は、父親とは全く異なる作風で、独自の作品作りをされています。千代市氏は、「人にやれと言われて作っても楽しくない。自分が楽しいと思うものを作ったうえで」という考えでした。ゆえに、万佐年氏は「千代市陶房の作品というものはなく、二人の作家の作品が陶房にはある」と言われます。万佐年氏のお弟子さんもこの度独立されるのか。作品は違っても根底に流れるものは継承されているのではないかと思います。

千代市氏は、「若いときに見とくことに意義がある」と、二十歳半ばかり海外にも積極的な目を向け、視察や研究、個展開催のため頻繁に渡航してこられました。そのバイタリティーは今も衰えることはなく、コロナ禍が終息すれば、明日にでも海外に行きたいと意欲的に話されたことが印象的でした。



清水 万佐年 作 アメ色花生

令和3年度

兵庫県文化賞受賞

大上 巧氏（大熊憲）



兵庫県を活動の拠点とし、芸術・文化の高揚に貢献し、その功績が顕著な方に贈られる「兵庫県文化賞」を大上巧氏が受賞されました。

伝統的な「海老徳利」や焼締による作品を発表。「丹波焼陶器まつり」の立ち上げや、「登窯修復実行委員会」の委員長として、現役最古の登窯復活に中心的役割を果たす。丹波立杭陶磁器協同組合理事長、兵庫県工芸美術作家協会理事長などを歴任し地域の活性化・振興に尽力されたこととしての受賞です。

「丹波焼の本」はあっても、この地について詳しく書かれたものはありませんでした。若いときから、『グルーブ窯』を作ったり、丹波焼の地にたくさんの人々に来てもらいたい、みんなであるような取組をしてきたりしました。この賞もみんなの代表としていただけたと思っています。コロナ禍も早く収束して、多くの方にこの丹波焼の地に来ていただけたらと思います」と語られました。

今年度は他に植松奎三氏（彫刻）田中徹夫氏（書）中元孝迪氏（郷土史）野口武彦氏（学術研究）林伸光氏（文化振興）の5氏が受賞されました。

令和3年度兵庫県技能顕功賞受賞

市野年彦氏（茶陶まるか窯）
大上喜仁氏（丹波やまき窯）

取材 迫田 隆

国蝶オオムラサキの舞う

丹波焼の里づくり

国花や国鳥などと同じように、オオムラサキが日本を代表する国蝶として1957年に日本昆虫学会で決定されました。

オオムラサキは幼虫の餌となるエノキの木が豊かに茂り、成虫の餌となるクヌギなど樹液のなる木が茂る里山に生息します。かつては沖繩を除く全国各地に生息し、親しまれていた蝶ですが、今では都市開発や里山の荒廃などから、準絶滅危惧種にまでその数が減少しています。

成虫となったオオムラサキは羽を広げると10センチ以上と大きく、オスは美しい紫の羽を持ち、メスは茶褐色の羽をしています。



オス



メス

その生息は、7月から8月にエノキの葉に産卵、約半月で卵からふ化し、幼虫、さなぎと成長し、翌年6月から7月頃に羽化します。成虫は、1か月程度の寿命です。7月から11月にかけて厳しい冬を越す準備を始め、冬の間は絶食し、落ち葉となった葉の裏で過します。やがて春の新芽が出る頃に幼虫は木に登り、固い殻を脱ぎ、葉を食べて羽化する準備を始めます。



オオムラサキの数が減少したとはいえ、今も丹波焼の里では、自然繁殖したオオムラサキが舞う姿や幼虫が目撃されています。これは地域の人々が大切に守り育ててきた豊かな自然が残してくれた貴重な財産といえるでしょう。兵庫陶芸美術館の敷地内にもエノキの成木が残っており、さらに子どもたちやボランティアと一緒にエノキ幼木の植栽や飼育観察ケージづくり、オオムラサキの飼育活動など国蝶オオムラサキの舞う丹波焼の里づくりに取り組んでいます。



「国蝶オオムラサキの舞う里づくり」は、兵庫丹波オオムラサキの会を中心に丹波地域一円で取り組まれており、県立丹波の森公園をはじめ、丹波地域の小学校や企業などで飼育、観察、放蝶などが行われています。これらの取組は、昨年に亡くなられた丹波篠山市出身で世界的に知られる霊長類学者、県立丹波の森公園名誉公苑長であった故河合雅雄先生の提案で、丹波の森公園内に700本のエノキとクヌギの植栽がされた、オオムラサキが飛び交う丹波の森の復活に向けた環境づくりが始まりといえます。その後、2008年に丹波の森公園の飼育ケージでの本格的なオオムラサキの飼育活動が始まり、その活動が今では丹波地域一円での活動に広がっているところだ。

丹波焼の里でのこの取組は、ようやくスタートしたばかりです。一人でも多くの人々に参加してもらい、また、里を訪れた人々にオオムラサキの魅力や生き物と触れる感動を体感してもらえよう、やきものの里の新たな魅力づくりを進めていきたいと思っています。

（兵庫陶芸美術館企画・事業課）

逸品！ 兵庫陶芸美術館 学芸員 私のおススメ作品



島袋常明
「エジプト文様き落とし緑釉薬壺」
兵庫陶芸美術館（三浦徹コレクション）
「やきものを愉しむ」展に出品

当館に初めて、沖繩のやきものが加わりました。丹波焼とともに「民藝」として用の美が見出された壺屋焼ですが、その素朴さに鮮やかな釉使いが加わっており、私は目を奪われました。中でもひとときわ鮮やかなのが緑釉とコバルト釉です。壺屋焼の緑釉は、もみ殻と真鍮を混ぜて焼いて白土、土灰、透明釉を加えて作ります。また、透明釉にはサンゴを焼いて作った消石灰ともみ殻が含まれています。

花や鳥、ラッパ吹きの男性や穏やかな表情の女性などの織りなす不思議な世界を、掻き落として表現しています。エジプト文は、実際の沖繩の風景とは異なる特有のエキゾチックな情景が描かれたものです。20世紀前半に壺屋焼に現れた古典焼のうちのひとつで、本土から渡った実業家達がお土産として買い求めました。

第二次世界大戦で荒廃した那覇で戦後最初に復興した壺屋でしたが、皮肉にも新による登り窯での焼成が市街地で禁止されて多くの窯元が読谷に拠点を移しました。その中で、島袋常明氏は壺屋に留まりエジプト文を描き続けました。

ロクロ挽きに長けていた常明氏は、師事していた小橋川永昌氏の大型の作品まで見事に挽いたといえます。常明氏は残念ながら一昨年亡くなられましたが、娘婿である池野幸雄氏（丹波篠山市出身）がエジプト文の技を現在に引き継いでいます。

学芸員 上田健太郎

源泉かけ流しの日帰り天然温泉



緑に囲まれた広い露天風呂で
ゆったり、のんびり、ほかほか。
農産物直売所、軽食コーナーも併設、
1日ゆっくりお過ごしください。



◆ 入浴料 ◆
大人 700 円
（中学生以上）
小人 300 円
（小学生）
※小学生未満 無料

営業時間

AM10:00 ~ PM9:00 (PM8:30 受付終了)
※営業時間は変更になることがあります。

定休日 毎週火曜日（祝日は営業）

〒669-2153

兵庫県丹波篠山市今田町今田新田 21-10

TEL.079-590-3377

<http://yume-konda.com/>



HP



Twitter



Instagram





八代 清水六兵衛展 — 陶を構築する —

八代 清水 六兵衛氏



テーマ展の詳細、作家プロフィールは <https://www.mcart.jp/exhibition/e3305/>

兵庫陶芸美術館が2021年度「著名作家招聘事業」でお迎えした京都で約250年続く清水六兵衛家の当代、八代清水六兵衛氏にお話を伺いました。

— 陶芸の道に進まれたきっかけを教えてください。

やきものづくりの家に生まれましたが、跡を継げと言われた記憶はないですね。私が中学時代、後に七代となる父が彫刻家に転身していたこともあり、すぐにはやきものをしなくていいという雰囲気でした。昔、建築に関わっていた父の影響か、建築をやりたいと思うようになっていました。一方、当時現役だった祖父、六代も面と向かって跡を継げとは言いませんでした。外では「うちはどうなるんだ」と言っていたようです。

建築家を目指して東京の大学に進学、卒業時は就職難もありましたが、建築は共同作業なのに対し100%自分一人で作れる仕事の方が向いているのでは、という思いの中、身近にあったのがやきものでした。大学卒業後は、京都に戻り京都府立陶工職業訓練校で一年ろくろを学びました。次いで京都市工業試験場では釉薬を研究し三千種類ほど作ったと思います。その後、工房でも釉薬のテストを続けました。

訓練校では中学出たての人から30代までと幅広い年代が学ぶ中、比較的年の近い同期9名で「陶九会」を結成しグループ展を開催、約10年続きました。当時は新聞社が主催する公募展が多く1983年の朝日陶芸展のグランプリ受賞が東京での個展のきっかけとなりました。初の個展を開催したのは新大久保にある「マスタスタジオ」でした。走泥社メンバーでガラス作家の益田芳徳氏がオーナーのギャラリーで、美術評論家・小川照氏のコーディネートで開催しました。

— 初個展は何を展覧されましたか。
大きくはないですが公募展の流れを受けた作品が主で、オブジェというか花器にも使えるようなタタラの作品です。自分にはタタラ技法がびったりきました。

— タタラ技法についてお聞かせください。

図面を書いて形を決め制作していきます。建築を勉強していなかったらこういう手法はとってなかったかもしれませんね。土の板をのぼして作っていくので比較的薄い作品になり、焼くと「へたる」わけです。最初は形がいびつになりどうしようかと思いましたが、逆に「へたる」ということを形の中に活かしたらそれもありかなと思うようになり、朝日陶芸展の受賞につながったかもしれません。当時やきものの「へたり」は欠点でしたが、そこが評価されたようで以降、焼いてへたらずというのが特徴になりました。（へたりは）焼いてみないとわからないですが作る前に予測はします。86年の朝日陶芸展で受賞した作品は複数の板が異なるカーブを描いていますが、焼く前からこの形ではなく、同じパーツの中心部は深い切り目を入れ、外側にいくにつれ1cmずつ切り目を浅くすることで、成型時にはまっすぐのものが、焼くことで変化していきます。



《WAVE MOTION - II》1986 撮影：杉本 賢正

— 使用される粘土の産地はどちらですか。

今使っているのは石川県小松の半磁土の他、京都で使っている白土も使います。京都では粘土がとれないので、地元の粘土を使える丹波焼はうらやましい気もしますが、作品にあわせて各地から自由に選べるというメリットもあります。



【陶芸用語】
タタラ：粘土を板状にしたもの。
へたり：焼成時に全体が崩れ落ち込むこと。
ろくろなど成型時の場合は、粘土が薄すぎたり水分を含みすぎたりして重力に耐え切れず成型全体が崩れ落ち込むこと。

— 釉薬はどのように選ばれますか。

わりと無彩色ですね。色というのはそのイメージが前面に出てしまう。やはり形を見せるとなると黒とか白がいい。実はこの黒い釉薬も試験場で作った中の一つです。

— 六兵衛窯にお弟子さんはおられますか。
六代のころから会社組織にしたので、弟子ではなく社員という形です。ただ私の作品はすべて自分で作ります。

— 長年、大学で指導されていますが、若い世代へのメッセージはありますか。

いろんな刺激を受けるということですね。やきものだけでなく絵画、彫刻、写真とか建築とかいろんなものを見なさいと、学生には伝えていきます。陶芸の展覧会しか行かないというのではなく様々な分野から刺激を受けることで幅が広がると思います。私自身、学生時代、現代美術のギャラリーを見て回ったことがすごく大きい。当時見たコンテンポラリーアートがプラスになっている気がします。西武ホール（大津）で開催された「土・イメージと形体」はインパクトありました。秋山陽さんなど、こういう造形ができるんだ、土でこういう表現ができるのか！と感じました。

何をきっかけにして自分の中で消化していくかなんです。各々興味がある分野は異なると思います。私の場合は遺跡とか古墳でした。ヨーロッパの古いお城の廃墟などに魅かれました。それと、やはり建築、彫刻的な建築の形にも興味がありました。

— ヨーロッパはどこを回られたのでしょうか？

父と2人でポルトガルの古城などを一カ月ほど回ったことがあります。沖縄のグスクも結構見て回りました。完全に残っていない、自然に風化して朽ち果てていく。

その中に人為的なものが見つけられる。時代のロマンのようなもの、お城というより遺跡ですね。

— 空間についてお聞かせください。

自分の作品を語る時に「空間」という言葉をよく使いますが、それは建築をやっていたからかもしれないし、空間に興味があるから建築をやりたいと思ったのかもしれない。作品の中で「空間」は大きな意味をもつ。たとえば花器も内側に空間がある。形をみせてやろうと、穴をあけたり切取ることで、中の空間を表に出していきます。

— お父様・清水九兵衛先生の影響は？

大きいと思います。仕事に関しては七代六兵衛より、彫刻家九兵衛の影響が大きいと思います。父が忙しい時に彫刻の仕事を手伝ったことがあり、金属の表面をサンドペーパーで磨いたりやすりをかけたりといった作業を通して、モノを作っていくというのはいくつかの点で感じました。面白いと思ったのは作品を平滑にする作業で父は表面をなでながら「ここがへっこんで」「ふくれている」と言うのですが、自分にはわかりませんでした。しかししばらくやっているとわかるようになる。触覚で訓練すると磨かれる。それがおもしろかった。それだけでなく考え方にも、空間についても大きな影響を受けました。

— これからについてお聞かせください。
こういうものをやらないといけないというものは無い。各代がその時代にに応じてやっていけばよい。七代が陶芸をやめることに六代が理解を示したのもすこいと思います。「自分がやりたい表現を追求していく」とことではないかな。

京都の地で八代続く窯元でありながら、時代時代のニーズに合わせて変化していく清水六兵衛家。工房の建物を利用して作られた展示室には琳派に、黒染、焼締、色絵、染付に青磁、三彩、象嵌、三島、ラスターなど歴代の作品が並びます。各代で作風が異なり、自家の自由な風を感じられました。これからも各代の、新しい作風を拜見できることを楽しみにしております。

文・写真 増田知子 写真 迫田隆

●特別展のご案内

オールドノリタケ×若林コレクション
—アールヌーヴォーからアールデコに咲いたデザイナー—

3月19日(土)～5月29日(日)

明治中期から昭和初期にかけてアメリカを中心として海外に輸出された西洋風の陶磁器オールドノリタケ。本展では、日本屈指のオールドノリタケコレクションである若林コレクションから、多彩な色や形、技法によって生み出された花瓶や壺、テーブルウェアなどを紹介します。

オールドノリタケ
《色絵金盛善文飾壺》
1891～1921年 個人蔵



北澤美術館所蔵 ルネ・ラリック
アール・デコガラス モダン・エレガンスの美

9月10日(土)～11月27日(日)

19世紀末から20世紀前半にかけて、フランス装飾芸術の世界で活躍したルネ・ラリック(1860-1945)。本展では、世界屈指のガラスコレクションを有する北澤美術館所蔵品より、アール・デコの時代を代表するラリックのガラス作品を選びすぎり、芸術性と実用性を兼ね備えたその美しさに迫ります。

ルネ・ラリック
大型常夜灯《エニシダの花と枝》1920年
北澤美術館蔵 写真：清水哲郎



受贈記念 平井昭夫コレクション × 三浦徹コレクション
やきものを愉しむ 二人のまなざし—

6月11日(土)～8月28日(日)

神戸市在住の平井昭夫氏と三浦徹氏から現代陶芸を中心とする作品を受贈しました。平井氏は陶芸家・河井寛次郎(1890-1966)の作品に感銘を受け、三浦氏は丹波焼の壺と出会い自ら作陶するまでに魅せられました。それぞれの思いで親しめ続けたやきものを一堂にご紹介します。

左：河井寛次郎《呉洲泥刷毛目鉢》1960年頃
兵庫陶芸美術館(平井昭夫コレクション)
右：山田光《黒陶スクリーン》1984年
兵庫陶芸美術館(三浦徹コレクション)



●テーマ展のご案内

丹波焼の世界 season6

3月12日(土)～2023年2月26日(日)

2017年に日本遺産に認定された日本六古窯のひとつに数えられ、800年以上の歴史を持つ丹波焼。変化しながらも現在まで続く丹波焼の世界をお楽しみ下さい。

丹波《赤土部徳利》江戸時代前期
兵庫陶芸美術館(田中寛コレクション)
兵庫県指定重要有形文化財



兵庫陶芸美術館 〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭4 電話：079-597-3961 (代表) HP <https://www.mcart.jp>

丹波焼の里情報コーナーのご案内
「-丹波焼の匠たち- 丹波立杭焼伝統工芸士作品展」
2022年3月18日(金)～5月29日(日)
兵庫陶芸美術館 展示棟入口横 観覧無料
企画：陶芸文化プロデューサー
協力：丹波焼窯元等

プレゼントのお知らせ
兵庫陶芸美術館・陶の郷・こんだ薬師温泉の招待券を3施設セットでペア5組10名様にプレゼント。
●応募方法
ハガキに 〒住所・氏名・年齢・本紙の入手場所(〇〇美術館など)・ご意見、ご感想をご記入の上、下記の宛先までお送りください。
●締め切り
2022年8月末日消印有効。応募多数の場合は抽選。
●宛先
〒669-2135 丹波篠山市今田町上立杭4
兵庫陶芸美術館内「陶芸文化プロデューサー」宛
なお、ご応募頂いた方の個人情報(当選者への発送、本紙企画の参考以外の目的には使用いたしません。また当選発表は発送をもってかえさせていただきます。

プレイベント 丹波焼「春の軽トラ市」
4月23日(土) 10時～16時 兵庫陶芸美術館入口周辺

▼問合せ 兵庫陶芸美術館
電話：079-597-3961

※春ものがたり期間中は、展覧会観覧料を特別割引
一般1200円→900円
大学生900円→700円
70歳以上600円→450円、高校生以下無料

味覚コーナー・お楽しみ抽選会など
《兵庫陶芸美術館》
ギャラリー・コンサート・体験コーナー・

▼問合せ 丹波立杭陶磁器協同組合
電話：079-597-2034

窯元開放工房 最古の登窯焼成(5/25/4)、
スタンブラー、グループ窯作陶展など
※春ものがたり期間中は、立杭陶の郷入園無料

会場 立杭陶の郷、各窯元、兵庫陶芸美術館など
内容 午前10時～午後4時まで

期間 5月3日(火・祝)～5月5日(木・祝)
3日間

トを開催します。
緑豊かな自然に囲まれたやきもの里で、様々なイベントを開催します。

◆第16回「やきもの里 春ものがたり」

イベント案内

丹波伝統工芸公園

立杭 陶の郷

〒669-2135 兵庫県丹波篠山市今田町上立杭3
TEL.079-597-2034 FAX.079-597-3232
URL.<https://tanbayaki.com>

【入園料】高校生以上 200円

小中学生 50円

【開園時間】AM10:00～PM5:00 (通年)

【休園日】年末年始

毎週火曜日

(但し、祝日は営業します。)

丹波焼を『見る・作る・楽しむ』

窯元横丁

丹波焼の50軒の窯元の作品を買うことが出来る「窯元横丁」。どこか懐かしくあたたかな空間で、ゆったりと買い物をお楽しみいただけます。伝統的な丹波焼からアーティスティックな作品まで、さまざまなやきものが展示販売されています。一つひとつの作品をじっくり手にとりながら、散歩気分で歩いてみてください。見ているだけでも楽しくなりますよ。

陶芸教室

丹波焼の郷で、陶芸体験してみませんか。小さなお子様からどなたでも、手びねり(粘土細工)や絵付け体験に挑戦していただけます。釉薬をかけて焼き上げてから、ご自宅まで宅配便で発送いたします。あなただけのオリジナルやきものをつくってみるのも楽しいですよ。